
囚人～壁を乗り越える二人の紙飛行機～

ツバサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囚人～壁を乗り越える一人の紙飛行機～

【NZコード】

N8061Z

【作者名】

ツバサ

【あらすじ】

あの有名な鏡音三大悲劇の一つ囚人さんの鏡音レンの「囚人」リンの「紙飛行機」を原作にかきました。すばらしい原曲の方もぜひお聞きしてください。

序章・序文 page (前書き)

僕の初の長編作編です。誤字・脱字も多いため、よろしくお
願いします。

では、かたぐるじこ挨拶は「ひくん」にして本編どうぞ…。

序章・リンクside

「そんな、なんとかならないんですか?」

「はい・・・残念ながら・・・」

「そつそんな・・・」

パパはそう呟いてあたしの方をちらりと見た。あたしはパパに声をかけようとした。あたしはだいじょうだよ、と。でも声が出なかつた。

「せめて声だけでも、声だけでもないんですか?」

「いえ、今は声だけですがそのうち耳が聞こえなくなつたり、体が動かなくなつたりすると思われます」

そうなんだ、あたしの体動かなくなるんだ。なぜか恐怖は感じ無かつた。パパは「「」めん、「」めん」と言つていた。

序章・リン side（後書き）

ふう～アップ終了した。

レン：「おい！俺の出番なかつたぞー！」

落ち着けレン、今回はリン side 次はレンの番だよ

ああ、たぶんな。

レン：「たぶん！？」

じゅり また次回。

おひかわ

序章・レンさんは（前書き）

次はレンの番だよ。

レン：「おお～そつかー！！みんな俺の勇士見てくれよ」

うん、そんなにかっこよくないうじね～

レン：「えつかつこよくなーいのー？」

では、本編どうぞ

卷之三

母さん、母さん！」
僕は目の前に血を出して横たわる母親に向けて叫ぶ。でも、返事はない。後ろを振り返る。そこには、軍服をまとい、母さんを撃つた男たちがこちらに向かってくる。逃げなきや、そんなことは分かっている。でも、体が動かない。

「かあーさん！！！」

僕はまた叫ぶ。母さんが僕の頭をなでて、大丈夫だよ、と言つてほしくて。でも触れられたのは、頭ではなく腕、触つたのは、母さんではなく軍服のまとつた男達だつた。腕を後ろにふりあげられる。痛い。俺たちが何をしたつていうんだ。父さんもあいつらにつかまつた。ほかの仲間たちも僕たちは何もしてないのに・・・僕は最後に大きな声で叫んだ。

でもそんな声も空のどこかに消えて行つた。

序章・レン side（後書き）

はい、初のレン side 書き終えました。

レン：「俺泣いて、叫んではつかしだったな・・・」

仕方ないじゃん、そういう話なんだし。

リン：「次、あたしの番だよね？」

どうだろう、またレンの番かもしれないし、リンかもしれないし、ほかの side かもしれないからな

リン・レン「ほかの side？」

まあ、2次創作だし。通常の歌とまったく違う終わり方になるかも
しないから。あつそれと、この話が今年最後の投稿になると思いま
す。まだ、2作目だけど・・・それでは、良いお年を。

MEIKO・KAITO・ミク・リン・レン・ルカ「良いおとしを

！」

おまえら、いつからいたんだ・・・？

追記

編集しました。

レン「どうした？」

いや、ちゃんと歌聞いたら一人称が俺じゃなくて僕でや・・・

レン「おい！-！そこ間違えんなよ

すみませんでした。 ほら、レンも謝って

レン「なんで俺も！-！」

序章・カイトside（前書き）

あけましておめでとうございます。

一同「あけましておめでとうございます！！」

はい、みんなそろつてあいわつしたところで今回のsideですが、

KAITO sideです。よかつたね、KAITO

KAITO「よし、俺の出番だ！！」

リン「お兄ちゃん何役なの？歌にはお兄ちゃんが入るところなんて
なかつたけど」

まあ～KAITOが何役かは本編で、ではどうぞ！！

一同「どうぞ！！」

序章・カイト side

コツコツコツコツ、私の靴音が廊下に鳴り響く。私は大佐に呼ばれ、大佐のいる部屋に向かっている。私は扉の前に立ち一つ呼吸をして、扉を叩いた。

「入れ」

中から、野太い声が聞こえた。

「はっ、失礼いたします」

私は一声かけ中に入る。

「カイト君、君の功績はよく聞いているよ。先日も子供を一人捕まえたそうじゃないか」

「ありがとうございます」

私は適当に感謝の気持ちを言う。

「しかし、母親を殺^けるのは駄目だな。できるだけ生け捕りにするように。以上だ。持ち場にもどりたまえ」

「はっ、失礼しました」

私は大佐に一礼して部屋をでていった。持ち場に戻れ、確かに私は、先日捕えたレンとかいう少年がいる部屋の監督をしなければならない。しかし私は数日前、病気が発覚した娘の、リンのもとに行きたかった。私は天井を見上げて、愛していた妻とまだこの時間は病院のベッドの上で寝ているであろう娘の顔を思い描いた。

序章・カイトside（後書き）

はい、これがKAITO sideです。

レン「つまり、俺を捕まえた軍服の男兼リンのパパ役なんだな」
うんそうだよ、あつそれと、あくまで主役はリンとレンだからあま
りKAITO sideないかも。

KAITO「そうなの！？」

まあ～そうゆうこと。ちなみにこれで序章は、終わります。では、
また。

パパの仕事場で・リンside（前書き）

何とか一週間以内に投稿できた。

リン「おそかつたね。どうしたの？」

実は風邪ひいて・・・しかも投稿しようとして間違えて消しての繰り返しで

レン「田頃の行ないがわるいからじゃね～のか」

リン「かもね～ww」

リン、レン、双子でその攻撃はひどいぞーー！ー！ー！

リン レン「なにが～？」

こいつら

KAITO「ははは、それより風邪は大丈夫なのか？」

ああーちょっと咳が出てるだけでほとんど治ってる。といつかKAITOは優しいな。

KAITO「だろ？だから出番を増やして」

お前の本音はそこかい！！

パパの仕事場で・リン side

「リンちゃん、そろそろ起きなさい」

あたしは、自分の名前を呼ばれ目を少し開ける。目の前には看護婦の人が立っていた。あたしは声が出ないから起きたことをしめす為に次は目を大きく開け首を看護婦の方に向ける。看護婦の方は一つうなずいて病室を出て行つた。あたしはベッドの上に座つた。先週ははずつと検査ばかりで疲れたが今週に入つたら何もやることがなくなつた。暇で暇で仕方がない。この病院は昨日と一昨日でほとんど見て回つたからとても暇なんだ。パパは今日も仕事に行つてるらしい。パパの仕事場はここから徒歩で10分ぐらいでつくらしい。パパの仕事場？ そうだ今日はここを抜け出してパパの仕事場に行こう。パパに見つかつたら怒られるかもしけないけどきっと大丈夫だ。あたしは病院の寝巻の上に白いワンピースを着て白の帽子にピンクのリボンがついて帽子を手に取つた。あたしは看護婦さんに見つからないように注意して病室を出た。そして素早く階段を下りた。一階待ち受け室まで出たら帽子を深くかぶつて、顔を見られないようにしたらこのあたしを縛る病院から抜け出せる。あたしは早足で病院の扉を開ける。キーという音共に扉が開いて外に出る。久しぶりの外だつた。あたしは嬉しくて少し小走りの状態でパパの仕事場へと向かう。途中疲れて少し歩いたがほとんど小走りの状態だつた。あたしは大きいフェンスの少し手前で立ち止まつた。大きい、広い、ここがパパの仕事場？ でもなんでだろう、ここはこんなに大きいのになたしを縛る病院と同じ感じがする。いや、それ以上のものに感じる。あたしの思い違いかもしれない。あれ？ 誰かあそこにいる？ あたしと同じくらいの少年のようだ。うつむいていて顔が見えない。髪も同じ金色だつた。でも、服装が違う。あたしのきれいに洗濯された服にたいしてあの少年はひどく汚れた服装だつた。あたしは無意識のうちに少年のもとへと歩みよつた。少年は足

音にきずいたのかこちらを見上げた。

「・・・誰？」

あたしはその呼びかけに答えたかった。あたしはリンよ、と。でも声が出ない。少年はあたしが黙っているのを見てさびしげに笑った。
「だよな・・・僕のことなんか・・・どうでいいんだよな・・・」
あたしは少年の言葉に必死に頭を振る。違う、違うの。きずいて。
「違う・・・の？」

通じた。あたしは身振り手振りで声の出ないことを訴える。

「・・・声？」

そう声なの。あたしは両手で大きなバツ印を書く。

「ダメ・・・声が出ないってこと？」

あたしは大きく首を振る。すると少年は納得したようにでもどこか不安げに尋ねてきた。

「どうして僕のことを？僕がいやじゃないのか？」

なにがいやになるのかがわからない。あたしはこれでもかつとうぐらいくに頭を振る。

「僕のことが嫌いじゃない？・・・変わった子だね」

少年は自嘲気味に笑つた。あたしは何が変わった子なのかわからなからず首を傾けた。

僕と君・レンside（前書き）

よし、更新完了。

リン「今日は早かつたね」

まあね、学校が始まつたら更新が遅くなるかもしれないから。

レン「学校始まろうが俺たちには関係ねえよ。さっさと書けよ」

リン「だよね」

リン、レン前回からなんで攻撃してくるんだよ・・・

KAITO「二人とも落ち着いて、学校始まるんだからしかたないよ

KAITO優しいな～おま・・・なにか見たことがあるぞこの展開。

KAITO「だろ、だから出番を増やして」

やつぱりそれかい。といつかリン、レンなぜ僕をいじめる。

リン・レン「KAITO兄にやつてこれつて、まあみかん（バナナ）

もらつたからいいなだけね～」

KAITOお前が首謀者だったのか！！

僕はこの一週間でこの現実に絶望してしまった。僕らに未来などない。僕らは生きていってはならない存在なのか？僕が死なずにいられるのは僕と同じ暗い目を宿しながらも優しく語りかけてくれる、殺された母と似た人のおかげだ。でも僕は未来に光が戻ることはなかつた。僕はフェンスに体を預けうつむきながら母さんが殺されたあの日を思い出していると目の前に影ができた。ボクは顔をあげると僕と同じくらいの背格好の少女が立っていた。

「・・・誰？」

僕は少女に問いかける。しかし彼女は答えてくれない。そして思い出す僕の恰好を。彼女はきれいな恰好僕は汚い恰好。僕と君には差がある。僕は少し自嘲し言葉をつづける。

「だよな・・・僕のことなんか・・・どうでいいんだよな・・・」
そうに決まってる、だつて僕は自由を奪われ迫害を受ける少年、彼女はきれいな恰好をした少女だ。なにもかもが違う。僕はここから立ち去りうとした。その時彼女がずっと首を振つてゐにきがついた。

「違う・・・の？」

僕は彼女がそうではないかという少しの期待を込めて言つた。すると彼女は一つだけうなずきまたジェスチャーを開始する。何かを言いたいのか？少女はしきりにのど元をさしている。

「・・・声？」

僕は彼女に聞く。声がどうしたんだ？すると次は大きなバツ印を両手だやつた。バツ・・・ダメ。

「ダメ・・・声が出ないってこと？」

僕が言うと彼女は嬉しそうに首を振る。なるほど、声が出ないのか。でもまだ不安が残る。僕をバカにしにきてるのでは？

「どうして僕のことを？僕がいやじゃないのか？」

僕は問いかける。すると彼女は不思議そうな顔で首を振る。

「僕のことが嫌いじゃない？・・・変わった子だね」

僕はそう言つてまた自嘲して笑つ。この一週間で自分がいやになつてたからこんなことが口から出たのかもしれない。彼女はなにも知らない、本当にきれいな紙かみをもつていて。周りの大人のように、僕のように紙かみになにも落書きされてないんだろう。僕は勇気をもつて話しかける。このつながりをはなしたくない。

「また・・・来てくれる？ここに」

僕は彼女に問いかける。つながりを作りたい。彼女はどうしてそんなこときくの？と言わんばかりに大きく首を縦に振つた。僕は笑つた。自嘲も苦笑もない心からでた笑みだつた。

「ありがと・・・そろそろいかなきや」

僕はそういうて立ち上がる。そろそろ収集しゅうしゆがかかるはずだ。彼女は小さく手を振つている。本当は何か言いたいのかもしれない。話せないというのも辛いだろう。

「うん、バイバイ。だいたいこの時間帯はここにいるから。」

僕はまた来てくれるかもしないという期待をのせた言葉をいいこの場を去つた。

僕の日常・レンside（前書き）

レン「なんで連續でレンsideなのよ」

仕方ないだろ。交代でやるなんて書いた覚えないよ。

KAITO「そうだぞ、俺なんて出番まだまだ無いそうだし」

KAITOは前回、前々回の罪からじばりく出番なし！！

KAITO「そんな」

自業自得だ。あつそれと新キャラ登場しま～す。

レン「そな～んだ。誰？」

まあ～それは本編で。どうぞ。

レン・KAITO「どうぞ」

レン「俺のsideなのに全然しゃべってないってありえる？」

僕の小説だとありえる。

レン「なんだよ、それ・・・」

僕はあの子との話を回想しながら宿舎ロウヤに戻った。軍服を身にまとつ男がいた。男は僕たちを監視する目的でおかれているのであろう、しかしこの2・3日どこか上の空だ。僕はその男の顔を見ないよう奥の方へといった。男の顔を見ると怒りが溢れそうになりそうだからだ。僕は無意識のうちに拳を作っていた。

「あら、レン君。帰ってきたの」

僕は顔をあげるとそこには優しそうな顔の母とよく似た女人に話しかけられた。

「メイコさん。はい、そろそろ召集かなつと思つて」

「そうなの。そりば、そろそろこんな時間ね」

そう言つてメイコさんは笑いかけてきた。僕が絶望しながらも生き続けていられるのはこの人のおかげだ。

「あら?なんかいつもより明るい感じね?何かあつたの?」

顔色をうかがうようにメイコさんが覗き込む。

「ええーちょっと」

「ふふ、そう。良かつたわね」

僕は曖昧に答えるとメイコさんは微笑みかけてきた。きっとメイコさんも哀しいことがいつぱいあつたと思う。なのに子供の僕のためにいつも笑つてくださるのだ。僕にとってはとても嬉しい。さらに明日もしかしたら今日あつたあの子とまた会えるかもしれないからかなり久しぶりにドキドキしていた。

「集合!早く集まれ!」

僕たちが話していると召集の声がかかつた。

「レン君行いましょうか」

メイコさんは僕の頭にポンッと手を置いて笑いかけながら声の上がつた場所にいく。僕もメイコさんの後ろをついて行つた。

僕の日常・レンside（後書き）

はい、ところがMEIKOの登場です。

MEIKO「私の出番来たー」

よかつたね、MEIKO

ミク・ルカ「私たちの出番はー」

今のところないかも。

ミク「ボーカロイドといえば私じゃない？普通」

ルカ「私英語も話せるのに・・・」

いや、僕英語力ないし、この小説だと英語もネギも出てこないよ。

ミク・ルカ「どうでもいいから私たちを出せーーー！」

MEIKO助けてー

KAITO「めーちゃん良かつたね」

MEIKO「うん、あーでも私のsideは無いのかー」

んな」といいから、助けるーーーうわっちょ、みつミク、ルカもー

！！

紙飛行機・リン side (前書き)

リン「ねえ～ 文字数少くない?」
まつまあ～ね・・・

リン「まあ～ね、じゃないわよ!! それに改行も少ないじゃない」
だって、リンしゃべらない設定だしさ。KAITOとレン以外でし
やべる人もいないでしょ?

リン「だったら、レンかお兄ちゃん出しなさいよ!!」
レンは捕えられてるしKAITOは仕事があるって設定だしさ・・・

リン「レン、いる」

レン「なつ、何」

レンすら怖がってるし(ボソッ)

リン「ロードローラー用意して!!」

レン「はつはい」

ちよつ、ちよつとそれだけは勘弁してください。

リン「問答無用!!」

ミク「出番あるだけまじやない・・・ねえ、ルカさん」

ルカ「そうね・・・何もかもあの作者のせいね・・・」

ミク・ルカ「打倒、ツバサ!!」

あたしはあの男の子と別れ病室に戻った。途中看護士さんに出会い、あわてたがあたしのことを見向きもしないで小走りで去つて行った。体調が急変した患者がいたらしい。あたしにとつたら好都合だ。ベッドに座り棚から手紙用の紙を数枚と鉛筆を取り出した。話せないなら書けばいい。

『ほんにちは。もう、わかってると思つけどあたししゃべれないの。だから手紙で挨拶するね。あなたが言つてた「僕のことが嫌いじゃないの?」って質問だけど改めて答えるね。全然いやじゃないよ。むしろあなたに会えて嬉しいよ。あなたはどうかな?』

PS: あなたにも紙を数枚と鉛筆をあげるからあなたの手紙ほしいな。』

息をついて手紙を見る。これがあなたに明日渡そう。明日のことを思つてドキドキする。こんな感情も久しぶりだ。

あつ・・・しました。あたしは声にならない独り言を口にする。あなたとの間には壁べくがあった。どうしよう・・・あつそうだ。また声にならない独り言を言つ。手紙を三角形に折つて・・・手紙をどんどん折つていぐ。出来たのは紙飛行機だ。これを飛ばせばあなたのもとに届くはずだ。あたしはウキウキしながら紙飛行機を棚にしました。また明日もここを抜け出してパパの仕事場で・・・

紙飛行機・リン side (後書き)

はあ、はあ、はあなんとか逃げ切つた。
ルカ「裏路地に隠れたとしても無駄よ」
ミク「私たちに取つたら好都合だもん」
ちょつ、ルカ、ミクー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8061z/>

囚人～壁を乗り越える二人の紙飛行機～

2012年1月14日15時45分発行